

茶 梅 (さざんくわ)

筆 記 欄

茶梅は山茶科に属する常緑喬木で、暖地では山野に自生するも、多くは觀賞用として庭園などに栽培せられる。幹は丈餘に及び老樹に至れば相當大木をなし數丈に達するものも尠くない。花は晩秋より翌春まで咲き續け、色に淡紅、濃紅、白色、絞などあり、單瓣と重瓣があつて相當美花である。

生花には花の季節のみを以てし、多く行の花形に取扱ふも、材料に適當なものがあれば眞・行・草何れに生けるも差支はない。茶梅の個性を生け表はすには一種生を最も可とするが、之れに他物の根締を配することも決して差支はない。

茶梅は喬木でありスク／＼と立ち上ることが個性であるから、喬木の性状を表はす意味に於て、幾分水際を高い位に取扱ひ、下段を軽く中段以上に葉の繁味を見せることにし、如何に曲ある古木を用ひるとしても、之れが個性を示すために何れかの部分にスラリとした幹を見せることが肝要である。以上の點は茶と全く反對せるものとして考へれば餘り間違は生じない。

若枝は總て素直に取扱ひ、之れに技巧を加へて曲を持たせるが如きは甚だ好ましからぬ事である。また相當太い花形、殊に砂鉢などでは十分に重味ある曲の多い幹を使つて姿を整へる事など大切である。

花器は金、土器よく、花形によつては竹器、籠の類も差支はない、この花は祝儀にも佛事にも生けてよいが、祝席には枯木、切止、殘花などを用ひず、花形や根締の草木にも注意を肝要とする。

茶 梅 (さざんくわ) 本 勝 手 行 の 花 形 (籠)



猿猴杉に小菊

(えんこうすぎ・こぎく)

猿猴杉は松杉科の陰性常緑木本で、山地に育つものであるが、其の枝條長く垂れ下がり、猿猴の風姿を想はせるが如き、異様の趣があるので専ら觀賞用として庭園に植ゑられる。生花に於ても此の點を賞し、四季を通じて材料に用ひられる。

花の姿は行・草いづれにも生け得るが、素より花の無いものであるから、必らず當季の草木の花をこれが根締に配する事にせねばならぬ。而して華道では此の木の自然に倣ひ垂れ物として取扱ふ事になつて居る、それで花形中適當の所に數個の垂れ枝を見せなければならぬが、其の個所は一定して居ない、しかし總て垂枝は三段以上と云ふことになつてゐるから其の點を尊重し、且つ必ず垂れを陰陽振分に使ふやう心掛くべきである。垂れの數も決まりはないが、普通一二箇所又は四五箇所に見せることにする。ただ三箇所垂れることは三垂と云つて使はないことになつてゐる。

垂れに就て心得べき事は、一瓶中高さを同じうする垂枝を使はない事と、四五箇所にも見せる場合は、一二箇所だけ垂れを十分に見せ、他は僻く程度に用ひて使ふことが肝要である、尤も一二箇所を垂らす時はすべてを十分に垂らすことがよいのである。

猿猴杉は普通の置生を始め、一重又は二重の立上生、二重の上、船など何れの花形に取扱ふも差支はないが、陰性の木本であるから、一切の祝花には用ひず、殊に婚儀、養子女の祝席にはサルの語に通ずるものとして忌む。

筆記欄

猿猴杉に小菊

(えんこうすぎ・こぎく)

本勝手

行の花形(土器壺)



草 珊 瑚 (せんりやう)

筆 記 欄

草珊瑚(仙蔘・千兩)は金粟蘭科の常緑灌木で、暖かい地方では山野の陰地や日陰などに自生するが、専ら觀賞用として庭園に栽培せられる。通常叢生して高さ二三尺に達し、葉は長卵形で鋸齒を有し莖に對生する。夏の頃梢頭に黄綠色の小花を攢簇し花後小果を結び十一月頃に至つて熟し翌春まで落ちない、實の色に紅と黄がある。

仙蔘は長い年月を要して伸びるものであるから、素直に育つものもあるが、頗る雅趣に富んだ曲を示すものが尠くない、それで其の材料如何によつて眞行草いづれの姿にも取扱ふことが出来、生花では總て實の熟する季節に限り用ふる事になつてゐる。

而して華道の規定として、實物には必ず當季の草木を、之れが根縮に使ふことになつて居るに拘はらず、獨り仙蔘にあつては一種生をなすことが許され、殊に陰性の木本でありながら之れを上花として祝儀の席に生けるも差支ないとされてゐる。

斯かる特別な取扱をされて居るのは、此の木が高雅清爽の趣を備へ、其の氣品聖賢を想はしめる程のものであり、且つ成長遅々たる點に於ても貴重なものであり、加ふるに萬木落葉し木枯の姿を示す折柄、暗綠色の葉間に玉の如き紅果、黄果を見せ、實は翌春まで梢上に止まるなどの諸點を賞して實物の王位となし、上述の如き取扱をなす事になつて居るが、また實際に仙蔘は一種生にしてこそ十分に其の個性を表はし、風情や氣品を發揮し得るものである。しかし場合によつては他の草花を根縮とするも差支はないが、仙蔘を他物の根縮には用ひてならぬ。

草 珊 瑚 (せんりやう) 逆 勝 手 行 の 花 形 (籠)



猫柳に小菊

(ねこやなぎ・こぎく)

筆記欄

猫柳は楊柳科の落葉灌木で川邊を好んで自生するが、また人家にも栽培されることがある。幹の高さ五六尺に達し、形状は行李柳等に似て葉も亦普通の柳のやうである。此の木は雌雄株を異にし、冬の頃葉に先だつて芽を生じ早春花を開く、花穂は柔滑で絹糸状の白毛を密生し長さ二寸位にも及ぶ。

この芽は初めに褐赤色の薄皮を被て居るが、其の色ついた皮を被て居る處に雅趣のあるものであるから、生花では外皮の脱落しない、未だ落ち残りの葉ある頃より使ふこととする、それで此の花の季節は十二月頃より翌春三月節句までとされて居る。

總て川柳の類は至つて素直なものであるから、力めてしなやかに柔しく取扱ふことが肝要である。そして本数は幾何用ふるも差支はないが、枝と枝との交叉や縫れを見せることなく、恰も梳つたやうな感じを與へるやうに整へることが肝要である。また灌木の自然性に倣つて枝の岐れ口を低く取扱ひ、各枝先を長く優しく上げることにする。この意味に於て副の如きは普通より幾分下の方で岐れしめ、副先もまた稍低い目に使ふことが適する。

花の姿は眞・行・草何れにも生け得るが、二重・掛・釣などには餘り好ましくない。猫柳には花はあるが其の美を賞する程でないから、必らず當季の草花を根締に使ふことにし、之れに相應しいものは金盞花、菜の花の如きである。

柳は佗びしいものが調和よいのであるから、花器として土器・籠などがよい、しかし他の品々も用ひて差支はない。この材料は根締の選擇にさへ注意すれば賀席にも佛事にも生けられる。

猫柳に小菊

(ねこやなぎ・こぎく)

逆勝手

眞の花形(竹の寸筒)



梅嫌に小菊 (うめもどき・こぎく)

筆記欄

梅嫌(落霜紅)は冬青科の落葉小喬木で山野に自生するが専ら觀賞用として庭園に栽培せられる。高さ丈餘に達し春日新芽を出し、五六月頃に至り淡紫色又は白色紅暈ある小花を葉腋に簇生し花後實を結ぶ、此の實は秋に至つて紅熟し落葉後は更に鮮紅色を呈し頗る美觀を極む。

梅嫌の花は餘り賞するに價せぬものであるから、生花では實の紅熟する十月の初め頃より取扱ふ事にし、之れを實物となし必ず當季の花ある草木を根柢に使ふことにする。而して此の木は至つて曲の多いものであるが、若木は概して素直であるから眞の花形にも適するが、其の他はすべて行草の姿に整へることにする。

此の材料は曲が多く而も挽め難いものであるから、自然の曲を利用して巧く姿を整へ得るやう材料の選び方に心を配ることが肝要である。尤も太い幹などは鋸目を入れて叮嚀に挽めて詰木をすればよいが、指大の物に至つては殆んど挽めを施し得ないものである。

初秋の頃僅かに實が色づいた頃より生花となすが、此の時は幾分葉を残して使ひ十一月頃には残りの葉あれば取り除くことが適當である。なほ花器によつては相當な太い幹を使ひ、ことに廣口などには木を添へて生けることが望ましい。其他特に注意すべきは根柢の色彩であつて、紅色の實を結ぶものには白又は黄色のものが相應しく白の梅嫌には紅花をもつてするがよい。此の材料は實物の落葉樹であるから祝席には生けてならぬ。

梅嫌に小菊 (うめもどき・こぎく) 本勝手 行の花形(御玄猪)



南天に小菊 (なんてん・こぎく)

筆記欄

南天は小蘗科に属する常緑灌木で山地に自生するも専ら観賞用として庭園に栽培せられる。幹は普通五六尺なるも稀には丈餘に及ぶものもある。葉は羽状複葉で、毎年五六月頃に白色五瓣の小花を攢簇し、花後球形の實を結び秋に至つて熟する、色は大てい赤色であるが、中には白色又は黄色のものもある。

南天は實の美しさを賞して専ら生花材料に使ふのであるが、成るべく葉の締つた小形の葉を選ぶことが都合よいものである。而して本数も二本か三本位に止め、廣口の花器に大きく生ける様な場合にも五七本を越えないやうにせねばならぬ。

此の木の自然として一ヶ所に數枚の葉を傘のやうに出して一團をなすものであるから、生花もこれに倣つて二階、三階、五階、七階とハツキリ區分して見せることにする。實もまた二房の他は三、五など奇數に使ふことが肝要である、そして南天の實は十分に熟したものが最もよく垂れるのであるから、此の自然に倣つて副に垂實を用ひ、眞には立實を使ふ考が望ましい。

南天は實物であるから之れを生ける場合には必らず花物の根締を必要とするが、通用物である關係上根締には草花を選ばなければならぬ。南天に最も調和よいのは菜の花であるが、これが得難い場合には寒菊又は金盞花を以てするが、實との色調に注意が肝要である。花の姿は行最も適し場合によつては眞の姿にも生け得る、花器は籠を第一とし土器、木器、竹器之れに次ぐ。

南天に小菊

(なんてん・こぎく)

本勝手

行の花形 (御玄猪)



冬の燕子花 (かきつばた)

初冬の頃に至ると花莖の伸び甚だしく減少するを以て、總て葉よりも花を低く見せる事とし、開花と苔とは何れを高く使ふも差支なく、眞や副の葉には枯葉や蟲喰葉などを用ふることが相應しい。

それより次第に寒さの募るにつれ花をすつと低くし、葉の半以下の高さに使ふ考で取扱へばよく、眞を葉のみとし、花は副や體に使ふことにする、そして眞副の葉は半分位枯れたものが相應しいが、低く使ふものは綺麗な葉を用ひなければならぬ。

燕子花は一二月頃に花を見ることがあるが、其の頃のもの花莖極めて短かく低い所に花を見るのである、而して葉は低い部分のみ青い美しいものを見、その他は殆んど全部先枯れ葉であるから、此の自然に倣つて取扱ふことが肝要である。

本圖の如く咲き遅れの花を一輪使つて生けることがある、斯かる取扱を冬の珍花と稱へてゐるが、此の場合にも眞や副の葉は半分以上枯れたものを使ふことが相應しく、花は至つて低く所謂副と云はれる位置よりも下けて用ふことが適當であつて、冠り葉を花よりもすつと高く使ひ、其の他低く使はれた葉のみ青い美しい葉となすものである。

燕子花は葉組に最も重きをなすが、之を觀賞するのは花が主であるから、他の葉物とは意味を異にし、陽性の水草であるから祝席にも生けてよいが、その場合は多く白花が用ひられる。切り花を水に養ふ時は眞直ぐに立て置く事が肝要で、斜になつてゐると花首に歪みが出来て取扱にくいものである。

筆記欄

冬の燕子花

(かきつばた)

本勝手

行の花形 (土器壺)



老松に小菊 (らうしよう・こぎく)

若松は至つて素直に立ち上り枝には圓味を見せ、新芽は勢よく一年に數尺も伸びるが、老樹になるにつれ漸次大枝が垂れ下がり、各枝先のみ小枝が繁茂して、玉のやうな團をなすが、それは赤松において特に甚だしいものである。また水邊ことに海濱の松など、老樹になるにつれ、漸次海の方に根を張り枝を伸ばすので、一種趣の變つた面白い風情を表はして來るものである。

中年松や老松は行又は草の花形に相應しいのであるが、本圖の如き赤松の老松は、枝先に葉が叢生して玉の如く團をなし、それが段々をなしてゐるやうに取扱ひ、また一瓶中幾箇所かに葉のついて居ない枯枝を見せることなど、風情を表はす一法として面白いものである。なほ老松は其の自然に倣つて、枝先を何れも垂れ氣味に取扱ふことも大切である。

老樹の相當太い幹を使つて、砂鉢などに生けることもよく、垂れた枝を利用して、二重の上などに生け蟠龍の趣を見せることも面白い。而して砂鉢の花形は眞に對して副や體を低く使ひ、十分に張らせて平た味を見せ、根締の椿や躑躅なども、眞副に對して貧弱ならぬやうにせねばならぬ。また二重生の時は上口の松に小菊などの根締を配し、下の窓に梅その他適當のものを用ひて、三重生にするも差支ないのである。

老松は折れ易く特に節の部分などは撓めないことにせねばならぬ。また撓めても戻り易いので太い幹など鋸目を入れて楔撓めにするによい。

老松に小菊

(らうしよう・こぎく)

本勝手

行の花形(土器壺)



檜柏に白玉椿

(いぶき・しらたまつばき)

筆記欄

檜柏は(伊吹と書き、杉柏の別名もある)松杉科の常緑喬木で、幹は聳立して相當の太さになり、雄大の趣を示し頗る品位の備つたものである。それで華道では松・檜と共に三木として重く取扱はれてゐるが、普通生花に使ふものは畑に栽培せられた若木であるから、花形を整へるには便利であるけれども、檜柏としての自然性は現はし得ないものである。

檜柏は其の個性より見て眞・行の置生となすことに適するが、自然の枝振に面白いものがあれば、二重に懸崖の姿を生けることも差支はない。しかし若木を二重の上や釣などに生けることは、此の木の自然性より見て餘り好まぬ。すべて若木は新芽の長く伸びるものであり、姿も素直であるから眞の花形などに相應しいが、相當の老木は行に適する、而して何れも多くの小枝を分ち、その枝先は立ち上るものであるから、小枝の長さ二三寸にも及ぶものは、一本一本丁寧に撓めて美しく捌くことが肝要である。

檜柏は老樹になるにつれて、所々に木肌を現はして來るのであるから、此の感じを表はすために、眞や内副の或る部分の小枝を切り透して、幹を見せるやうにすることはよいのである。また古木を中段胴の箇所用ふることも雄大な風姿を見せて頗る面白いものである。

此の木は年中を通じて生花材料に用ひられるが、必ず當季の花物を之れが根締に使用ふことにせねばならぬ、而して根締の材料としては木物では椿・躑躅など相應しく、草物は何を用ふるも差支はないが、其の色彩の調和に意を配ることが肝要である。

檜柏に白玉椿

(いぶき・しらたまつばき)

逆勝手

行の花形(蓬菜)



白梅 (しらうめ)

梅は薔薇科に属する陽性の落葉喬木で高さ二三丈にも達する。種類に白梅・紅梅・寒紅梅・八朔梅・臥龍梅・早梅・臘梅などがあり、單瓣・重瓣・大輪・小輪。色に白・紅・淡紅・臘色などあつて、實にも大小の相違がある。

梅は樹幹剛健の風を示し、大枝小枝ほとんど直角に勢よく出で、多くの交叉を見せる。殊に其の新芽が勢よく伸び上り、一年で數尺に及ぶ、これを壽榮と呼んでゐる。斯の如く梅は男性的であり、氣品の高きこと他の何物も追隨し得ない特徴を有し、殊に萬木雪に埋もれ芽さへ崩さない折、百花に魁けて芳香復郁たる花を開くので花の兄と敬はれ、昔より梅を四君子の一つに算へ尊んでゐる。

梅の若樹は主として眞行の姿に取扱ひ、老樹は眞行草何れにも用ひられるが、行又は草の姿最も相應しい。而して若梅は成るべく強く伸び上つた枝を眞や副に用ひ、體に稍老いたる枝を使ふことがよく、老樹は専ら簡素を尊ぶもの故、小枝や花を割合に少なくし、幹を働かせて繁雜ならぬやうに取扱ふことが大切である。

梅は眞の前などに太い木を使ふことがよく、二本も用ふる時は、細い他の一本は副のあしらひか體に使ふことが相應しい。苔木も用ひて差支ないが、改まつた祝儀の席には好まぬ、また老木を生けた場合には、眞副の間に二本か、或は陰方に強く一本の壽榮を見せることがよく、時としては眞又は副を壽榮とすることも出来る。なほ梅には多少の交叉や目立たない副下の小枝など差支はない。また梅は一種生最もよく、之れに根縮を配するもよく、時としては葉牡丹を根縮とするも差支ないが、松竹梅生の他は梅を他物の根縮には用ひない。

筆記欄

白梅 (しらうめ)

本勝手

行の花形 (土器壺)



若松に白小菊

(わかまつ・しろこぎく)

松の種類は多々あるが生花として専ら用ひられるのは赤松・黒松・五葉松・蝦夷松などで、何れも松杉科に属する常緑喬木である。而して松の中で赤松と黒松とは、他の物に優れた特徴を有し、其の雄幹凛々として冒すことの出来ぬ威厳を具へ、諸木の追随し得ない風姿を示せるものである、されば我が華道では松・檜柏・檜の三つを特に三木と稱へ、常緑樹の中でも最も品位あるものとして取扱はれてゐる。

松は成るべく少ない本数をもつて生けることが、松の品位も現れ個性も示し得てよいのであるから、特に一本をもつて真副の姿を整へ、根締を配するが如き取扱もよいとされて居り、多くの場合二本位をもつてするのである。尤も新年の翠松は五七本使ふことにするが、しかし其の場合には真一本、副一本の姿に見えることにするものである。

松は真・行・草何れの花形に取扱ふも差支はないが、概して若松は真に適し、中年松や老松は幹の姿や枝振の如何によつて真・行・草ともに生け得られる。それで本圖の如き若松は其の自然に倣ひ、素直に慎ましやかに生け、真の花形に整へることがよく、花器もまた真に属する物を選ぶことが肝要である。

而して一瓶に二本を使ふ時は、其の材料が同種であり、樹齡もほぼ同じ程度のものが望ましい。しかし場合により他種のものを取合はせることもあるが、斯かる時は真と副が全然別個のものに見え、自から花形を具へ且つ全體の調和均衡を巧にしなければならぬ。

若松に白小菊

(わかまつ・しろこぎく)

本勝手

真の花形(角花生)



翠松に白玉椿

(みどりまつ・しらたまつばき)

新年の若松として市中の花屋に翠松が賣られて居る。これは四方の小枝なく一本一本であるから甚だ不自然のものである。それで之れを取扱ふ場合は次に示す如き考で姿を整へることが肝要である。

普通の場合七本位を選び、その中一番優れた一本を真と定め、真の前あしらひに一本、後あしらひに二本都合四本とし、副は副先になる一本、前あしらひと後あしらひに各一本を使ひ都合三本をもつてし、姿を整へる心得としては、真が一本副が一本で其の他のものは悉く真副の幹のつき枝と見做ことにせねばならぬ。それで真の前後の三本は陰方と陽方とに見せ、恰も中央の真の幹より三本の小枝の出たやうになし、副は前後二本のあしらひが副の幹より出たものとして取扱ふのであるから、随つて若松に於ては普通の花形よりも、あしらひ枝を幾分低い目に使ふことが相想しいのである。花の姿は眞の花形に適し、改まつた祝席に生ける時には、青竹寸筒を用ひ花配も井筒に組む。

松は如何なる場合にも一種生をなさず必ず草季の草木の花物を根締に配する。而して松に最も相應しいのは菊であるが、白玉椿の如きもよく其他節分後の水仙・百合・長春・躑躅なども調和よいものである。

松は年中を通じて生けられ、其の風姿諸木に優れ且つ緑かはらぬ操を賞して、總ての席如何なる場合にも生けて喜ばれるのであるが、席によつて之れが根締に意を用ひなければならぬ。

翠松に白玉椿

(みどりまつ・しらたまつばき)

本勝手

眞の花形(竹の寸筒)



南天に白小菊

(なんてん・しろこぎく)

筆記欄

南天には随分葉の大きいのがあつて、稍もすると花形が横擴がりになり生けるに頗る困難することがあるから、成るべく葉の縮つた小形の物を選ぶがよい、しかし止むを後ぬ場合は自然の姿に見えるやう鉢を入れて小さくする外はないが、しかし葉を切り細めることは、南天の自然がもつ葉先のしなやかさを失ひ、甚だしく不自然になることは免れ難い。而して之れを切る場合は、始めは一度に切る事をせず、全體の折り合を見ながら、少しづつ、何回にも切り細めることが肝要である。

南天は葉の集團を二段の外はすべて奇數とするが、同時に一團の葉數も亦奇數を選ぶことにせねばならぬ。そして枝と枝・葉と葉の纏れなきやう整へることは素より大切であるが、一團の葉を使ふために、幹を覆ひ隠すことのあるのは差支ないと思はれてゐる、しかし主要な部分を隠すことは好ましくならぬ事である。

なほ直接に霜雪を受くる部分は葉が焦茶色に變するが、蔭の箇所は依然として青色をなして居るので、此の情趣を生け表はすために、眞や副に映葉を使ひ、蔭となる部分には青い葉を見せる事が最も老練な取扱方である。

南天は至つて葉の落ち易いものであるが、數日天氣が續きよく晴れた日の午後二三時頃で、最も水氣の渴れた時分に切り取るやうにすれば、普通の二三倍位は保たせ得るものである。また生ける際に切口を少し焼き、鹽を溶かした液中に暫時挿し置いて後ち生けることがよいのである。而して花器が金屬でない場合は器中にも鹽を少々入れて置けば更に有効である。

南天に白小菊

(なんてん・しろこぎく)

逆勝手

行の花形(平籠)



檜葉に白椿

(ひば・しろつばき)

筆記欄

檜葉は松科に属する常緑喬木で相當の高さに達す。元來山野に自生するも、多く庭園などに栽植せられる。種類にしもふりひば、しのぶひば、ひよくひば、黄金ひば等色々あるが、何れも檜に似たる樹皮を有し、葉は小形の鱗片状をなして全部莖に密接して居る。春日單性花(雌雄別花)をつけるが全く美觀を添へぬ、花後茶褐色の毬果を結ぶ。檜葉は其の葉美しく、殊に黄金檜葉の如きは、各枝先の葉が黄金色を示すので珍重せられ、枝葉の恰好もよく整つて居り年中何時にても用ひられるので、専ら生花材料に使用せられる。

花の姿は大てい行の置生となすが、本圖の如き若枝は素直に立ち上るのであるから、眞に近い行の姿に取扱ふことも相應しい、また相當老樹など太い幹を使つて砂鉢などに生けることも面白いものである。

此の種類は花はあつても賞するに足りないものであり、また年中いつにても使用するのであるから、必ずしも當季の花物を之れが根締に配することに定められてゐる。檜葉に相應しいのは椿や躑躅の如き木物もよく、金盞花や日々草、菊などの草花もよい、また砂鉢に水陸生をなし女株に杜若を配するが如きは、夏時の取扱としては頗る面白いものである。

花器は金屬器の如き堅いものも調和するが、また土器・竹器・廣口など花形の如何によつて何れを用ふるもよい。而して常緑樹で相當品位もあるから、之れが根締の選擇に當を得れば、新築、移轉の外大ていの席に生けて差支ないものである。

檜葉に白椿

(ひば・しろつばき)

逆勝手

行の花形(御玄猪)



寒 櫻 (かんざくら)

筆 記 欄

寒櫻は彼岸櫻に似たるも幹や枝が稍細くて節立つて居る、そして晩秋の頃點々花をつけるが、至つて遊んで淋しみのあるものである。

花の姿は眞にも取扱ひ得るが主として行の花形となす、時としては二重の上口にも生けることもあるが、行以外の姿は餘り相應しくない。

此の花は其の自然に倣ひ、十分に遊味を具へ、幾分淋し味のあるやうに取扱ふことが肝要である。そして大てい一種生をなすが、場合により秋の小菊や寒菊の如きものを根締に配することは差支はない。しかし椿や其他の木物の根締は相應しくない。

寒櫻は落ち残つた葉や新しく出た葉などは、取り除かないで其儘に使ふことにするが、眞の表や副の部分に照葉の四五枚も見せ、眞の下段に近い箇所や體の奥の方などに、若葉のついた小枝を使ふやうにすると、自然味をよく現し得る計りでなく、花の姿も頗るよく整つて都合よいものである。また副と眞との間に、餘り艶々しくない葉を適當にあしらふことなど、場合によつては非常に姿をよく見せることになるものである。

元來が花の少ないものであり、遊味と淋し味のあるもの故、餘りに花を多く使ふ時は、稍もすると寒櫻の風情を失ふことになる。しかし着き花を強て取り捨てるには及ばないが、求めて花の多い枝を使ふ要はないのである。枝も亦この意味で多く使はず、少い数であつざりと生けた方が、寒櫻の風情が現されてよいものである。

寒 櫻 (かんざくら)

逆 勝 手

眞 の 花 形 (御玄猪)





寒

櫻

(かんざくら)

逆勝手

眞の花形(竹の寸筒)

寒

櫻

(かんざくら)

筆記欄

寒櫻は白色の八重咲で晩秋の頃、散り残りの紅葉や、秋に出た若葉の間などに混つて點々花を見せ、中には相當多くの花をつけるものがあるが、概して淋しく滋味に富んだものである。

花の姿は多く行に取扱はれてゐるが、それは材料がこの花形に相應しい事と、寒櫻の自然性を生け表す上に、最も都合よいからである、しかし適當な材料を選んで、本圖の如く眞の姿に生けることも面白いが、草の花形に取扱ふのは餘り相應しくない。寒櫻は至つて花形を整へよものであるから専ら稽古材料に使用せられて居るが、總ての場合餘り材料を多く用ひず、花も極めてまばらに見せることが寒櫻の風情を表はしてよいものであり、落ち残りの葉や新葉などを適當に生かして使ふことも亦肝要である。



赤芽柳に白椿

(あかめやなぎ・しろつばき)

赤芽柳は猫柳・行李柳・絹柳などと同様に灌木状を示し、餘り大木にはならないものである。柳の類は總て水邊を好んで生育するものではあるが、之れは純然たる陸木であつて、決して水陸通用物ではない。

赤芽柳は至つて素直に育ち、枝と枝との交叉なども無く、優しくしなやかな性質のものであるから、生花としては常に此の個性や、風情を失はないやう取扱ふことが肝要である。

花の姿は眞・行・草いづれに整へるも差支はないが、此の木の自然性より見て、二重の上や掛・釣などに生けることは相應しくない、しかし材料が得易く、取扱も極めて容易であるから、稽古の場合これによつて種々の花形を研究する意味に於て使ふことは素より差支ないのである。

柳は線の美を尊重するものであるから、餘り葉の多くついて居ない季節に使ふことになつて居る、それで我が池坊では十一月頃から翌春にかけて用ひ、花はあつても賞するに足りないものとして、必ず當季の花物を之れが根締に配することに定められてある。

而して生方で特に意を用ふべき事は、幾本を使つて生ける時も、枝の捌き方に意を注ぎ枝の交叉などよく、整然として恰も梳られたやうに、美しく整へることが大切である。なほ此の木は大木にはならないが、或程度までは大きくなるものであるから、數多く生ける場合や根締に椿の如き木物を使ふ時には、相當の幹を用ひることが望ましい。草花の根締では金盞花や菜の花の如きが相應しく、水陸生には杜若などが適する。

赤芽柳に白椿

(あかめやなぎ・しろつばき)

逆勝手行の花形(平籠)



金雀花に小菊

(えにしだ・こぎく)

金雀花は四五月頃に黄金色蝶形の花を多くつけるので頗る美観を呈するが、總ての枝條至つて細かく、且つ素直に伸びて梳られたやうな美しさをもつてゐる。この風情は他の草木に於て見る事の出来ない特徴であるから、花道では此の點を賞して花や葉の無い頃にも生花材料に用ふることになつてゐる。

斯の如く細い枝條に無数の花をつける爲めに花時には甚だしく垂れ下がるので、華道では之れを垂れ物とし、一瓶中に二、三ヶ所に垂れ枝を使ひ、その他にも數ヶ所に靡き氣味の小枝を見せる事にする、しかし花時以外の時は餘り垂れを深く示さないものである。本圖は冬季の金雀花で最も垂れの少ない季節であるから、殆んど垂れを用ひず、僅かに眞の陰方に細い一枝の垂れを見せて、之れが出生を示す程度に止めてゐる。

此の木は四五月頃には美花を多くつけるので一種生もよく、また之れに調和よい草花を配するも差支はないが、花季以外の時には必らず當季の草花を根締に使はなければならぬ。なほ金雀花は草木通用物であるから、之れが根締に木物を配することは宜しくない。

花の姿は眞・行・草のいつれにも生け得るが、如何なる場合にも其の枝條に少しの交叉や、もつれ等のなきやう一本々々丁寧に捌いて、十分に之れが風情を表はすことに力めなければならぬ。

金雀花は至つて優し味のあるもの故、之が花器は籠・土器・竹器などが相應しい。尤も金屬器をも用ひて差支はなきも、少しく堅い感じを與へるやうである。

金雀花に小菊

(えにしだ・こぎく)

本勝手

行の花形(御玄猪)



縦に小菊 (もみ・こぎく)

縦は松科に属する常緑大喬木で、山地に自生し高さ數丈、周圍一丈にも達するものがある。葉は密に互生して二列生をなす、雄雌花同株に開き花後三四寸に及ぶ大毬果を結ぶ。此の木の枝葉は整然たる風姿を備へて居る爲めに、庭園の樹木として栽培せられ、また生花材料にも多く用ひられてゐる。

幹は至つて曲少なく殆んど直立の姿に育つものであるから、此の自然に倣つて生花では眞又は行の姿に取扱ふことにするが、相當枝葉の繁茂するものであるから、行の花形に整へるに最も適する。

此の材料は四時容易に得られるものであるが、花あつても決して美しいものではないから、何時にても必ず當季の花物を之れが根締に用ふることにせねばならぬ。縦は喬木であるから之れが根締には木物でも草物でも使ふ事が出来る、しかし枝葉が相當繁味を見せて居るので、餘り貧弱なものには相應しくない。それで木物ではドツシリとした姿の椿や、繁味をもつ躑躅などが適し、草物では菊や日々草の如きが調和よいものである。而して相當花形を大きく取扱ふ時や、砂鉢などに生ける際は太い幹を使ふことがよい。

縦は頗る強味を感じるものであるから、之れに使ふ花器は金屬器の如きが相應しく、また重々しい土器なども調和よいものである。此の材料は特に改まつた祝席でない限りは、如何なる時にも生けて差支はないのであるが、其の場合に應じて根締の選擇に意を用ふることが肝要である。

縦に小菊

(もみ・こぎく)

本勝手

行の花形 (御玄猪)



猫柳に小菊

(ねこやなぎ・こぎく)

猫柳は川邊などに自生する落葉灌木であるが、時として庭園などにも植えられる。高さは五六尺位に止まり、葉は長楕圓形をなして稍厚く其先端は短く尖り、葉柄の基部に不正形の托葉を有し、葉面には毛茸を生じ、裏面は灰白色を呈してゐる。此の木は雌雄別株であつて、早春葉を萌す前に花をつける。花は柔滑で絹糸状の白毛を密生し、長さ二寸餘に及ぶ。花の色は紅色で黄藥を現はす。

花の姿は普通に眞や行を以てするが、場合によつては草の花形にも取扱ふことが出来る。僅かの本数をもつて寸筒にスツキリとした眞の姿を生くもよく、相當の本数で薄端などに行の取扱をなすことも適するが、本圖の如く水面を廣く見せる砂鉢の如きに數十本を使つて生けるなど、水邊に灌木状をなして育つ猫柳の取扱方としては相應しいものである。また之れに石を配し、水草を根縮に使つて水陸生をなすなど面白ものである。

猫柳の花は相當美しいものではあるが、すべて生花に使ふのは主として蕾の季節で、花はまだ皮を被てゐる時分であるから、花は觀賞するに値せぬが爲めに、必ず他物をもつて之れが根縮に使ふことにする。而して柳に相應しい根縮は、寒菊・金盞花・小菊・日々草・菜の花・節分後の水仙など總て柔しきものがあるが、調和よいものである。

柳の枝條は元氣よく立ち上るものであるが、それでも幾分の歪みがあるから、一本一本丁寧にためて眞直になす事が肝要で、これが完全に出て居れば水際も美しく揃つて花の締りもよく、枝先の亂れもなく整然たる花形を作ることが出来る。

猫柳に小菊

(ねこやなぎ・こぎく)

本勝手

砂鉢生



枝垂柳に白玉椿

(しだれやなぎ・しらたまつばき)

枝垂柳は楊柳科に属する落葉喬木で高さ數十尺に及ぶ。總て水邊濕地を好んで生育するも、其枝條を賞して庭園などに専ら栽培せられる。葉は長卵形で邊緣に微鋸齒を有する、花は雌雄の別あり各々その姿を異にし、色は黄綠色である。

枝垂柳は枝條が大きく垂れるものと小さく垂れるものと別がある。それで華道では之れを大垂・中垂・小垂の三種に區別して取扱ふことにする。而して之を生花に用ふるのは早春新芽の出初める頃より三月の節句までと限られてあるが、これは柳の枝條を賞する意味に基づき定められたものである。

花の姿は大てい行又は草を以てするが、小垂の適當なものがあれば、本圖の如く眞の花形にも取扱ふことが出来る。何れの花形に於ても相當太い幹や朽木などを使つて老樹の趣を見せることが相應しいものである。

枝垂柳は花の無い頃に生花に用ひ、また花はあつても美しいものでは無いから、必ず當季の草木をもつて之れが根縮となすことに規定されてゐる。而して之れが根縮に相應しいものは白玉椿や寒菊などであるが、拵や釣に生けた場合など、フキノトウ又は菜の花の如きを使ふことも面白い。また砂鉢に杜若を配して水陸生をなすなど、水邊に多く育つ柳の取扱として頗る趣あつてよいものである。

柳はすべての賀席や佛事にも生けてよいものとされてゐるが、其の場合によつて根縮に適當なものを選び用ふことが肝要である。花器は土器・籠の類が最も相應しく、其他水ザレの砂鉢もよく、竹器・金屬器も用ひて差支はないものである。

筆記欄



枝垂柳に白玉椿

(しだれやなぎ・しらたまつばき)

本勝手眞の花形(竹の寸筒)

紅 椿 (べにつばき)

椿は種々變つた特徴や他に例を見ない個性を有して居るものであつて、其の第一は他の樹木に比しドツシリとした重々しい感じをもつて居る。それは若木の間は普通の常緑樹と同じ様であるが、相當老樹になれば枝の出が彎曲を示して來るためである。第二は鬱蒼たる繁味のある事で、幹を蔽ひ隠す程に多くの葉をつけ、殊にそれが下枝の方に甚だしく、且つ濃綠色の葉は肉厚く太さも相當にあるので殊更にその感じを深からしめる。第三は優れた風韻を有して居ることで、別に椿は氣品高いものとは云へないが濃厚な綠間にクッキリとした白玉椿、或は熱情脈々たる眞紅の紅椿、何れも云ひ難い美しさをもち、又一面には古木の淡々たる姿、靜寂なる趣、いづれも他の及び難い雅趣を具へてゐる。第四は椿が大自然の微妙な働きを姿の上に歴然と現はして居る點である、即ち寒椿は自然の雪霜を防ぐやう下向に花が咲き、葉をもつて之を蔽ひ、春椿は之れに反して陽光を受くべく上向に花を見せ、葉の上に花冠をのぞかせるやうに出來てゐる。第五は寒椿は花の季節が長いために一時に花を開くことなく少しづつ、絶間なくつけ、春椿は全く之れと反對に、一時にバツト咲き揃ふので、頗る賑やかではあるが、寒椿に比して風韻に乏しい。

この他に微細な特徴を擧ぐれば限りなくあるが、生花に於ては以上掲げたる個性や風情を遺憾なく花形の上に見せる事に力むべきである。なほ此の花は一種生もよく他の木物の根幹として相應しい。花器は金屬器を始め何れも用ひられ、出征・仕官などの祝席を除けば大ていの場合生けて差支はない。

紅 椿 (べにつばき) 本勝手 行の花形(喇叭形花器)



白梅 (しらむめ)

梅は眞・行・草いづれの姿にも生け得るものであつて、梅のみの一種生を最もよいとするが、場合により他物をもつて之が根締となすも差支なく、枝の選び方用ひ方其他一般に互る事柄は已に前に記した通りであるが、また花形の如何によつては夫れノ、特別に心得べき點があるので、茲には本圖の如く眞の生方をなすに當つて心得べき概要を記すことにする。

眞の姿を生ける場合は、必ず寸筒または其の他の餘り口の廣くない花器、即ち眞に屬する器を選び用ふることは云ふまでもないが、材料としては如何なる物が適するかと云ふと、梅では若枝の強く伸び上つたもの又は壽榮の如きを眞副に選び、其の他の箇所に稍老た枝を使ふことが相應しい、そして枝の數も成るべく少なくし、開花なども餘り多く見せず、力めてスツキリとした清楚な姿に整へることが肝要である。此の意味に於て眞又は副を壽榮とする事もよく、また若枝で眞副を整へた場合は、壽榮を用ひなくてもよいが、すべて梅は立ち上つた勢を見せる事が肝要であるから、この趣を十分に表すために、眞や副を高い目に使ひ、それに比して體が割合に低いやう思へる程度に取扱ふことが普通である。

尤も眞副に老木を使ふことも差支はないが、其の場合には必ず寸筒を用ひて、梅の勢を示すことにする、尙老木の時は若木の場合よりも本數を少なくして、専ら簡素に整へることを旨とせねばならぬ。體は大てい老枝を使ひ、時として他の草木の花を配することもある。

筆記欄

白梅 (しらむめ)

逆勝手

眞の花形 (竹の寸筒)



白梅 (しらむめ)

梅を行之姿に取扱ふ場合は、行に屬する薄端や壺の如き花器を選び、器に應じて材料の多少、幹の大小を考慮しなければならぬ。尤も行の花形にあつても、若木・老木ともに用ひられるが、若木の場合は相當の枝數を用ひ、小枝も多く用ひてよいが、老木の時は簡素を旨として取扱ふことが肝要である。

眞や副に若木を用ひた時は體に稍老木を使ふことが相應しく、また餘り太くない幹を配することもよいのである。梅の生方には普通二三本の壽榮を使ふことにするが、眞副に若木を用ひて十分に立ち上る趣を見せた場合は、必ずしも壽榮を用ひなければならぬ事はない。また體に比して眞や副を割合に高く使ふことは、梅の伸びくんとした自然性を表はす意味であるから、眞・行の花形如何を問はず梅の置生一般に通ずる取扱と心得て差支はないものである。

梅は里のものより開き始め漸次奥地に及ぶものであり、一本の木でも下枝から咲き初め、若木より老樹が先きに開花を見るものである、これ等の點に鑑みて副や體などに多く開花を見せ、中段以上ことに眞などは蕾勝となすことが、自然味を表はしてよい計りでなく、梅としての風韻も窺はれて氣高く、奥床しく感ぜられるものである。以上は梅の取扱すべてに及ぶ一般的心得であるから、本圖の如き廣口生にあつても大體は適用し得ることは勿論なるも、砂鉢生などの場合は、また格別の心得も必要である故別項に於てそれが詳細を記す。

白梅 (しらむめ)

本勝手

砂鉢生



白梅に紅椿 (しらむめ・べにつばき)

廣口の花器を使ふ場合は、相當花形を大きくせねばならぬ、従つてそれに相應しいやう可なりの幹を一二本位あしらつて生ける事が普通となつてゐる。而して梅は眞行草ともに一種生をなすことが、最も梅の個性も表はれ品位も備はつてよいのであるが、場合によつては椿・寒菊・福壽草・款冬花・節分後の水仙など、花形に相應しいものを選び用ふることもよいが、如何なる場合にも此の廣口の花器に生ける時は、副體を他の花形と割合を異にし、特に低く取扱ふことが肝要である。

しかし眞だけは何れの材料を使ふ時にも相當の高さに見せるものであり、殊に梅に於ては眞によつて立ち伸びた趣を表はさなければならぬのであるから、その點に意を用ひることが肝要である。それで廣口の生方は副體が低くて相當張つてゐる爲めに大體の姿が低く平たく見えるが、眞のみは相當の高さを保ち、伸び／＼とした草木の自然と其の個性を十分に表はすことにせねばならぬ。

梅は一重立上生・二重立上生・二重生・向ふ掛・横掛・置船・釣船など總ての花器に、悉くの花形を生け得るのであり、夫れ／＼取扱ひの心得を異にする點もあるが、夫れ等詳細は中等科に於て記すこととする。

梅は木質堅く折れ易いから小枝は鋏で切り目を入れてため、幹は鋸目を入れ楔挽めにするがよい、しかし梅は少々折れても水揚がりには支障を生じない。またお正月頃花を見るには十二月初に切枝を土室又は井戸で圍ひ、後取り出して生けるが、生けた花は暖かい室に置いて毎日少しづつ湯を注ぐと早く開花を見る。

白梅に紅椿 (しらむめ・べにつばき) 本勝手 砂鉢生



蝦夷松に白椿

(えぞまつ・しろつばき)

蝦夷松は松杉科の常緑喬木で寒帯地方に生育し、我が國では北海道・樺太に多く産する大體に於て松に似て居るが其の枝は何れも下垂の狀をなし、特に總の如き苔の寄生を見るのは此の木の偉觀である。而も僅か數尺の倭樹であつても同様の趣を示して、其の風姿數十丈の大木を想はせるものである。されば之れ等の點を賞して生花は勿論、盛花瓶華などにも多く用ひられてゐる。

蝦夷松は直ぐに育つものであつて幹に曲ある物は甚だ稀である、此の自然性に倣つて生花では眞又は行の姿に整へることにする、そして木その物が頗る雅趣に富み且つ嚴然たる風姿を備へ、品位の氣高きこと普通の松にも劣らない位であるから、此の木は松同様に眞副を一本で整へることが相應しいとされてゐる。

蝦夷松は常緑樹で花なき種類に見て必ず當季の花物を配することに定められてゐる、而して之れが根締には草木何れを用ふるも差支はないが、調和上より見て木物では白椿や躑躅などがよく、草物では餘り華麗でなくて品位ある黃菊・白菊の如きが相應しいのである。

花器は金屬器・土器などのしつかりした物もよく、また籠の類も用ひられる。而して此の材料は松の種類であるから大ていの際には生けて差支はないが、特に改まつた祝席には苔を忌む意味の含まつた場合が多いから、席の如何と根締材料を鑑みて適當に取扱ふことが肝要である。

蝦夷松に白椿

(えぞまつ・しろつばき)

本勝手

行の花形(蓬萊)





接骨木に小菊

(にはとこ・こぎく)

本勝手

行の花形(御玄猪)

接骨木に小菊

(にはとこ・こぎく)

筆記欄

接骨木は忍冬科に属し、原野に自生する落葉灌木であるが高さは丈餘に達する。幹は至つて柔かく中には太い髓がある。葉は羽状裂葉をなして對生し、早春新芽を出し小花を多數攢簇する。花冠深く五裂し白色をなす、花後赤色の小さい漿果を結ぶ。生花では草木通用物として取扱ひ、早春新芽を萌せる頃より材料に使ふ、此の木は頗る曲の多いものであり、しなやかな枝振を示して居るものであるから、其の線美を賞して二重の山口や掛・釣など草の花形に多く整へられるのであるが、しかし適當の材料を得れば本圖の如く行の置生となすことも出来る。

接骨木は通用物であるから、之れが根締には一切木物の花を用ふることは許されない、必らず當季の草花を配せねばならぬが、此の季節のもので根締に相應しいのは小菊の類である。しかし他に調和よき草花があれば何れを用ふるも差支ない。



榛の木に小菊

(はんのき・こぎく)

榛の木はハリノキとも稱へ樺木科の落葉喬木であつて山野に自生するも、至つて湿地を好むものであるから、地方によつては水田の畦畔附近に栽植して稻掛けとなす。高さは五六尺位で葉は楕圓形又は長楕圓形で淺い鋸齒を有する。葉に先だつて早春暗紫褐色の單性花を同株に開く、雄花は圓筒狀莖花をなして下垂し、鱗片内に一二花を有し、雌花も小さき莖花をなして上向き、多數の鱗片より成つて紅紫色を呈する。實は楕圓形で小鱗は密に重疊し、古來より染料に供せられる。榛の木の種類にヤマハリノキと稱へられ、高さ二三丈にも及ぶものがある、大體は榛の木と同じやうであるが、其の葉は殆ど圓形をなして居る。

生花としては早春の頃葉の未だ出でない、花の頃をもつてするが、この木は幹も枝も花も褐色に近い色をなしたもので、相當雅味は備へて居るけれども、花は決して美しいものではない、それで此の材料を使つて生ける場合は必ず當季の花物を之れが根幹に配することにする。而して榛の木は高さ僅かに五六尺に及ぶ小喬木であるから之れが根幹としては木物よりも草花の類が相應しいものである。

花の姿は専ら眞又は行で、ことに相應しいのは行の置生とされてゐる。この木の出生や風情より見て草の花形の掛や釣には好ましからぬものである。

花器は土器の如き滋味あるものが調和よきも金屬器や竹器・籠の類も用ひて差支はない。改まつた席や祝儀の床には好まず、専ら連花會合の花として廣く用ひられる。

筆記欄

二二六

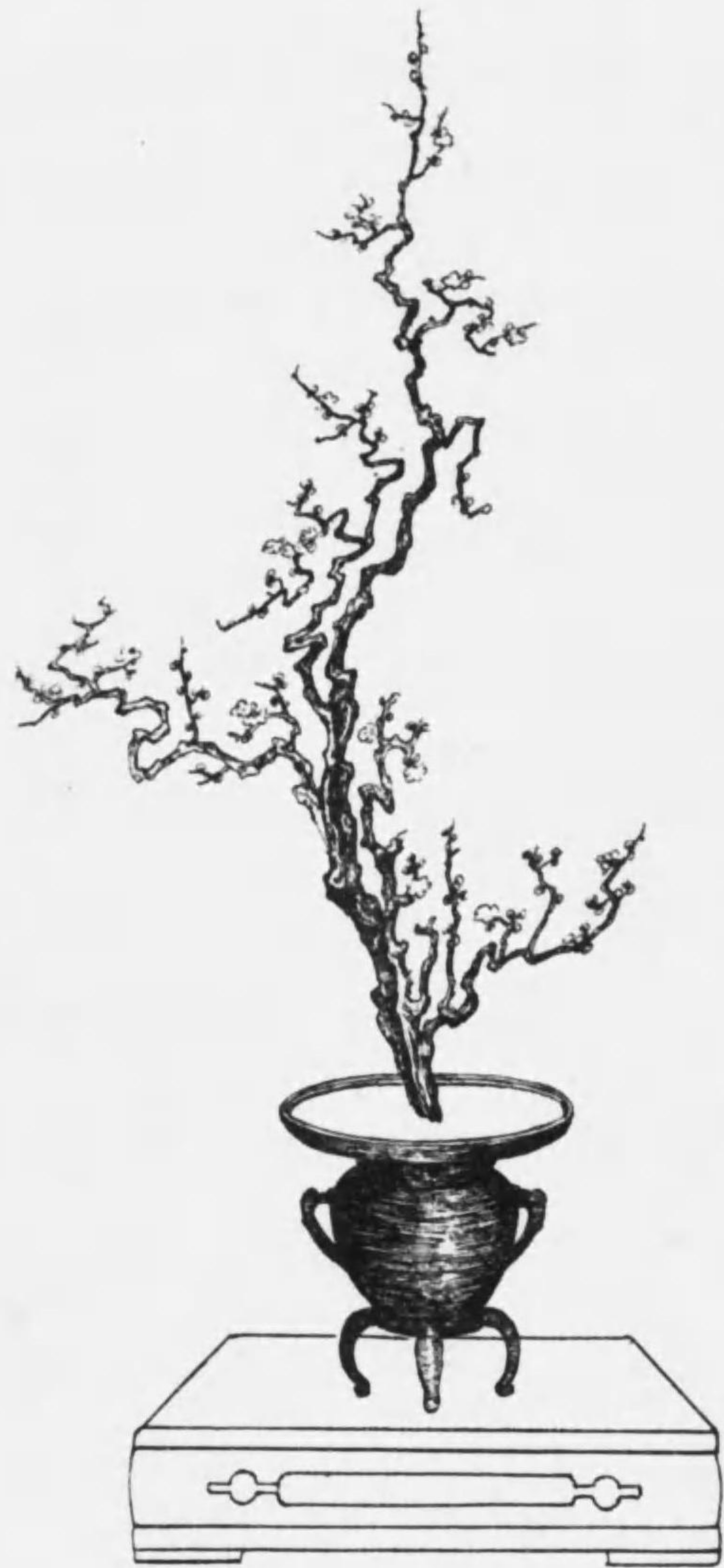
榛の木に小菊

(はんのき・こぎく)

本勝手

行の花形(土器壺)





臥龍梅

(がりゆうばい)

本勝手

行の花形(薄端)

臥龍梅

(がりゆうばい)

筆記欄

臥龍梅は其の若枝は普通の梅のやうに素直に伸びるが、年たつにつれて漸次枝に曲を示して来る、殊にそれが小枝までに及ぶのであるから、一種特別な風情を示すことになる。

臥龍梅は眞行草ともに生け得るのであるが、其の風姿より見て、之れを眞の花形に取扱ふことは餘り好ましくない、それで普通に本圖の如く行の姿に生けることにするが、二重に懸崖の姿に生け、又は月形の花器や釣船などに使ひ、或は向ふ掛や横掛など草の姿に取扱ふことが相應しいものである。この材料は枝や幹の曲線を賞し、たいてい一種生をなすが、場合によつては椿・寒菊・菜の花・金盞花・福壽草・水仙の如きを根締に使ふことも差支はない。



榿に白椿 (かや・しろつばき)

榿は深山に自生する常緑喬木であるが、また觀賞用として多く庭園などに栽植せられる。幹の高さは數十尺にも達するものがあり、葉は濃緑色の扁平針狀で椗に似て居るが、其の端が尖つて彼の矢筈狀をなすものとは趣を異にする、花は四月頃開くも美しいものでなく、秋に至つて雄樹(雌雄株を異にす)に葇狀の實を結ぶ、實の長さ一寸近くもあつて内に兩端の尖つた核がある。

此の木は常緑樹で年中何時にても生花材料に採り用ふる事が出来るが、必ず當季の花物をこれが根締に配しなければならぬ。而して喬木であるから、椿・躑躅など美しい花をもつ木物は勿論、總ての草花も根締として使ふことが出来る。

花の姿は此の木の自然出生より見て眞又は行の置生になく得るも、最も相應しい形は行である。また相當太い幹を得た場合には砂鉢など廣口の花器に大きく花形を整へることも面白いが、斯かる取扱に於ては根締に椿又は大中輪菊の如き、相當重味のあるシツカリした材料を使つて、一瓶全體の調和均衡を圖ることが肝要である。

花器は金屬器・土器の如きが最も相應しいのであるが、花形によつて竹器・籠の類も用ひられ廣口の花器も差支はない。此の花は専ら連花會合の席花として用ひられるが、根締の品柄によつては普通の床花として生けて差支なきも、改まつた祝席の花としては好ましくない。

榿に白椿

(かや・しろつばき)

本勝手

行の花形 (壺)



中年松に菊

(ちうねんまつ・きく)

筆記欄

松の種類は多々あるが其の代表的のものは赤松と黒松の二種で、何れも若木のうちは至つて素直に育ち、新芽など一年に數尺も伸びるが、中年の松になると漸次この趣を失ひ、ことに老樹に及べば大枝が垂れ下がり、各枝先のみに小枝が繁茂して玉のやうな團をなす、これは赤松に於て著しいものである。また海邊の松など老松になるにつれて、漸次風に抵抗する働を生じ、海の方に根を張り併せて枝をも延ばして一種趣の變つた風情を示すものである。

生花では此の自然性を表はす爲めに、若松は主として眞の姿に生け、中年松・老松などは枝振の如何によつて眞又は行・草に取扱ふことにする。而して若松の素直に、傾やかに取扱はれるに反し、中松ことに老松などにあつては雄大味を主として取扱ふ事が肝要である。それで幹の數も一本か二本に止め、幹の曲を利用することに力めなければならぬ。

眞副に別枝を使ふ時は成るべく同種の松で樹齡も同じ位のものがよいが、材料の都合で老松の眞に若松又は中年松の副、又は黒松の眞に赤松の副を使ふ等の事も差支はない、しかし此の場合眞と副とが別個のものに見えて花形をなし、全體としても均衡を保つてゐることが大切である。

松の根締に最も相應しいのは菊であるが、其他のものでも白玉椿・百合・長春・躑躅・節分後の水仙など何れも調和よいものである。松は何れの花器を使ふも差支なく根締に注意さへすれば總ての席に生けてもよいものである。

中年松に菊

(ちうねんまつ・きく)

逆勝手

行の花形(御玄猪)



山茶莢に小菊

(さんしゆゆ・こぎく)

山茶莢は山茶科に属する落葉喬木で幹の高さ丈餘に達する。初春のころ葉に先だつて黄色の小花を攢簇し相當美觀を呈するので、専ら庭園などに培養して觀賞用とされる。此の木若枝は至つて素直であるが、老樹となれば枝の出方が角張つて来て、枝先が幾分垂れ氣味になる。しかし老樹であつても之れに生ずる新枝は若木同様に素直な趣を示してゐる。

此の木は至つて挽め易いものであり、若木老樹それ〴〵異つた風情も表はし得て面白いので専ら生花材料に使用されてゐるが、餘り花の盛り期よりも黄褐色の苞より僅かに花が綻び出した頃のものゝ最も風情あつてよいものである。しかし此の場合相當の枝數を用ひないと何となく淋しみを感ぜ、春らしい氣分を見せることが出来難いものである。

花の姿は眞・行・草何れにも適するが、概して若枝は眞・行に適し、相當の老樹は行・草に相應しく、また面白い曲線を持つ枝などは一重・二重などに、立上生をなすもよく、廣口の花器に生ける場合の副の枝に使ふに適するのである。しかし此の材料は五七本を使つて行の姿に取扱ふことが最も相應しい。

山茶莢は一種生もよく他物の根輪を用ひて一瓶を整へるも差支はない、而して之れに相應しいものは白玉椿を第一とし、白菊・紅椿・赤椿色の金盞花・季節後の白水仙など何れもよいものである。

花器は金屬器、土器、竹器、籠いづれもよく、席は連花會合の時などに適し、特に改まつた祝席には生けないものである。

筆記欄

山茶莢に小菊

(さんしゆゆ・こぎく)

逆勝手

行の花形(薄端)



彼岸櫻 (ひがんざくら)

彼岸櫻は春咲の櫻の中で一番早く、三月の彼岸頃には已に花を見せるものである。淡紅白色の單瓣花は葉に先だつて枝一面に群り開き頗る美觀を呈し、散り際も潔よいのであるが、しかし山櫻の如き美しさや風情などは有たないものである。

この木は他の櫻と異り細くて虚弱い枝が可なり多く繁茂し、無数の花を着けるので、温味ある軟かい優しい感じを與へることが、特徴であり風情である。されば生花にあつても此の點に意を用ひ、前後左右に小枝を使つて充實した姿に整へることが肝要である。

花の姿は眞・行の置生となすことが最も相應しく、また老樹で適當な枝のある場合は、掛花生や釣花生に草の花形に生けることもよいが、すべて一種生となす事が好ましい。而して此の櫻は傳花ではないのであるから、胴に松を配するが如き取扱をしてはならぬ。

花形の如何によつて相當太い幹を用ふことは面白いが、虚弱い枝の繁茂したる如き取扱をなす場合は、綺麗に枝をさばく事が大切である。しかし餘りに枝を並べ過ぎるのは美しく見えても薄つべらになつて柔か味を失ふもの故、枝を前後に配して花態全體が圓味をもち、充實した姿とすることが肝要である。また開花を下枝に見せ枝先を吝勝ちとすることは春の花の一般に通ずる心得であるから、彼岸櫻にあつても此の心もちを失はないやうにせねばならぬ。なほ之れに他物の根締を使ふ場合は、椿・瑞香・菜の花・金盞花・季節後の水仙などが相應しく、花器は籠の類よく其他何れを用ひても差支はない。

彼岸櫻

(ひがんざくら)

逆勝手

行の花形(平籠)



白 桃 (しらもも)

筆 記 欄

桃は薔薇科の落葉亞喬木で原産は支那であるが、現今では我國到る處に栽培せられ觀賞採果に供せられてゐる。幹は丈餘に達し四月頃葉に先だつて花を開き後實を結ぶ。花の色は白・紅・淡紅・紅白交り等あり、單瓣・重瓣・大輪・小輪などの別がある。桃は梅の男性的剛幹に對し、肉付豊かで些しもゴツ／＼した趣なく、女性的の優美さをもつて居る。而して枝の出も亦梅の直角なるに反して岐れ口より枝先まで圓味を見せてゐる。以上の如きが桃の特徴であり、之れによつて其の風情をも表はすことになるが、また季節から華やかで春らしい、そして長閑な氣分を表はすことも桃の風情である。

花の姿は眞・行・草何れの花形にも生け得るが、概して若枝は眞または行の姿に適し、相當大きく花形を生ける場合、又は草の生方をなす時など老木を用ひ或は幹を配することが相應しいものである。しかし老木などを使つた時にも、花の姿が頑強になり女性的氣分を失ふ事のなきやう心掛くることが肝要である。

桃の若枝ことに緋桃などは陽を受くる方が甚だしく赤味を帯び、日蔭の方は青味勝ちであるから、花の陽方に赤味ある方を見せることや、種類によつて枝頭一寸位先枯の狀を表はすことなど自然味を表はしてよいものである。また桃の花は下より咲き初めるもの故、下枝に開花を多く見せ、枝先になるにつれ蒼勝ちとする考が大切である。

桃は大てい一種生をなすも、菜の花・金盞花・福壽草などを根締に使ふもよい。この花は芽出度いものとして總ての祝席に用ひられ、殊に雛祭の花として缺く可らざるものとされてゐる。しかし紅桃は新築落成の祝席に用ひてはならぬ。

白 桃 (しらもも)

本 勝 手

行 の 花 形 (薄 端)



連翹 (れんげう)

筆記欄

連翹は木犀科に属する小木本で多く庭園などに栽培せられる、高さは丈餘に達するものもあるが、總て枝が長く伸びて稍蔓状をなし、一株のうち數本は垂れを示すものである。早春葉に先だつた筒状の黄花を開き、相當美觀を呈する。

連翹の幹は至つてシナヤカで優し味に富み、その伸びくとした枝に無數の美花をつけて、春らしい華やかさを見せ、長閑な氣分を漂はすものであり、木本であつて其の枝頭が蔓状をなして垂れを見せる點などが、此の木の風情であり特徴である。

生花では枝先の垂れる事に重きをおいて之れを垂れ物として取扱ふことに定められてある、されば連翹を掛花生や釣花生に草の姿に生ける事の相應しいのは云ふ迄もないが、本來が木本であつて立ち上る木であるから、之れを眞や行の花形として、置生となすことも差支ないのである。しかし其の場合には必らず適當な箇所に垂枝を用ひることにせねばならぬ。

垂れ枝は一瓶中、一二ヶ所に見せるのであるが其の箇所は取扱ふ者の任意である、それで普通金雀花の生花に準じて、眞の陰方中段を垂らし又は副先を垂らすことにする、この取扱方は花形を毀す怖もなく、取扱もまた容易であるからである。而して何れの場合にも大切な一事は、必らず其の垂れ枝の先を上方に向はしめ連翹の自然性を表すべきである。

連翹は一種生最もよく、草物で黄色でない相應しい種類を根締に使ふことは差支ない。總て祝儀の席には生けないことになつてゐる。

連翹 (れんげう) 本勝手 行の花形 (土器壺)



薊

(あざみ)

薊は菊科に屬し原野路傍に自生する宿根草本で、直立した莖に刺ある葉が葉柄なくして、殆んど丁字形に着生して居る。花は春より秋にかけて開き、その形牡丹刷毛に似てゐて、色は紫・紅が普通で白・黄などもある。種類は多々あるが其の中で最も丈高くて莖堅く刺の強いものを鬼薊と稱へ、之より稍やさしきものに野薊・飛廉薊があつて普通に知られてゐる。この他にも色々あるが、性状は大同小異である。

薊は野草に屬するも其の野趣と雅致は亦格別であり、莖葉に刺を帯びて觸れば刺さんと身を守る峻厳な姿は實に男性美の趣がある。此の點を賞でて權威・獨立などの花言葉があり、薊格蘭では國華として尊んでゐる。

莖は幾分の曲あるも概して直ぐ出生のものであるから、生花としては眞より行までの姿に適する。本数は三本より五七本迄が相應しく、花は花形に應じて適當に用ふるも、すべて開花を高く莖を低く使ふことがよい。而して此の草の自然として最初根元の方に太い葉を輪形に密生し、その中央より莖を抽んでるもので、すべて下方の葉が大きくて密生してゐるから、生花も之れに倣つて、葉を花形に取り入れて巧く利用することが肝要である。

この花の生命は野趣と雅致であるから、餘り美しく作り上げる時は、却つて風情を失ふものであるから、何となく武骨で粗野な趣を見せることに力めなければならぬ。そして水際を少しく低く取扱ひ、相當の大葉を見せることが大切である。薊の根縮に他の草花を使ふことは差支なきも、大てい一種生に取扱ふことになつてゐる。花器は土器・籠など相應しく、刺あるもの故、祝席や客席には用ひない。

筆記欄

薊

(あざみ)

本勝手

眞の花形(土器長壺)



昭和十一年四月二十五日印刷
昭和十一年五月一日發行

池坊生花學習帖 初等科

定價 金壹圓八拾錢

著作兼發行者

京都市伏見區景勝町七一

熊谷八俣

印刷者

內外出版印刷株式會社代表者

須磨勘兵衛

印刷所

京都市下京區西洞院七條南入

內外出版印刷株式會社

不許
複製

京都市伏見區景勝町

發行所

大日本華道學院

電話(伏見)一三二〇八番
電話(大坂)五三二〇八番

終

